

氏名	川崎 賢子
学位の種類	博士(文学)
報告番号	乙第316号
学位授与年月日	2016年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	尾崎翠 砂丘の彼方へ
審査委員	(主査) 石川 巧 金子 明雄 宗像 和重 早稲田大学大学院文学研究科教授)

1— (1) 論文の構成

はじめに

第一章 歩くことと書くこと——初期散文から「歩行」まで

- 1 一九三一年「歩行」——方法としての歩行
- 2 初期散文から——境界を歩く
- 3 漫想的彷徨——驀進と隠遁
- 4 歩行と彷徨——眼・耳・鼻の散歩

第二章 兄の知と妹の変奏 ナンセンス・ユーモアの方へ

- 1 科学する兄たち——「第七官界彷徨」「地下室アントンの一夜」の遠景
- 2 受容器としての唯識——現象学・進化論・心理の遺伝
- 3 浮遊する分身と分心——漫想学的彷徨

第三章 めくるめく「七」の世界——「第七官界彷徨」

- 1 「七」とは何か
- 2 第七官界という次元——感覚のモンタージュ
- 3 おもちゃ箱の哲学——ミニアチュールと映像
- 4 第七官界と映画官

第四章 転生する「小野町子」

- 1 禁忌の境界
- 2 変な家庭——尾崎翠と「変態」現象
- 3 家のなかの「女の子」——少女領域の拡大と転位
- 4 孫娘と祖母——百歳の老女、千歳の少女
- 5 あらかじめ失われた恋人たち——恋愛／小説の生成

第五章 読む女、書く女、書かれた女

- 1 読みかえる女
- 2 ためいきと言葉のあいだ
- 3 「こほろぎ嬢」——書く女と浮上する「母」
- 4 書かれた女——ゴルゴーンの姉妹たち

おわりに——柔かい海

1— (2) 論文の内容要旨

尾崎翠は、没後いっそう評価が高まり、近年これを研究対象とする論文が少なからず発表されている。創樹社版『尾崎翠全集』（1979年）、筑摩書房版『定本尾崎翠全集』（1998年）が上梓されたのちも、複数の出版社から流布本が刊行され、かたわら初期作品の発掘も続いている。舞台、映画など隣接メディアにおいてもとりあげられた。尾崎翠の表現は、独特の比喻、イメージ、パロディーなど知的なたくらみにみちた造形を特徴とするが、おしむらくはそれを論じる者が、尾崎の独自性を特権化し、時に作家を神格化し、文芸の表現の歴史のなかで孤立的に扱いがちな傾向にある。その表象と言説を文芸史に位置づける試みは、作家像の相対化にも関わる。本研究では、こうした点をふまえて、尾崎翠が作家として活動したアーリーモダンから昭和モダニズム期にかけての文芸思潮を読み直しつつ、尾崎翠の表象と言説の成り立ちを歴史的に評価する方法を探っている。本論は『尾崎翠 砂丘の彼方へ』という表題で2010年に岩波書店から刊行した尾崎翠研究である。

第一章では初期散文から「歩行」（1931年）までを射程とし、「歩く」ことすなわち書く者の視点の移動に連れて変容する風景と心象を書くという方法について考察している。1910年代の習作期、尾崎翠は雑誌の「短文」「小文」欄に投稿を始めた。正岡子規「叙事文」（1900年）の提唱以後、『ホトトギス』誌を中心に「写生文」による短文、日記を書くことが奨励されていたが、自然のなかを歩みつつ書く方法は、移動しながら感覚の渦としての〈私〉を再編する方法でもあった。移動しながら〈私〉と世界の関係の変容を捉える散歩、漫歩、彷徨といった方法は、来たるべきモダン都市空間における遊歩者の方法に連続している。また、尾崎翠の初期散文は、意識の境界から内奥へとめぐらされる瞑想的なまなざしが働いている。その瞑想は写生の限界を越える象徴主義的観照であった。その意味で、尾崎のテキストは、1920年代以降のメディアに接続しつつ、社会的な役割関係を絶とうとする指向性ももっている。第一章では、そこに至る尾崎翠の表現の位相の飛躍について歴史的に考察している。

第二章では尾崎翠の文学における知的意匠について考察している。そこでは、現象学、精神分析学、進化論、遺伝学など、同時代の新しい知見がパロディー化されつつテキストに織りこまれ、独特のナンセンス・ユーモアを醸し出している。第二章では、新仏教の動向ととくに唯識の概念に注目し、尾崎翠文学における生命観、宇宙観、心理学の特徴を分析している。

第三章では「第七官界彷徨」（1931年）を精読している。モダニズム文学における対象の数値化＝記号化について、五官を越える「第七官」という概念に見出される諸感覚のモニタージュ、および、共通感覚の歴史的意味についてそれぞれ考察している。

第四章では尾崎翠文学における〈少女〉表象と言説について、ジェンダーおよびセクシュアリティ研究の方法を援用しつつ考察している。尾崎翠のテキストは成人男女の異性愛の関係にはおさまりきらない欲望が記されている。また「変態」言説が戯画化されつつ濫用される。片恋、失恋としてのみ意識される恋愛、家族親族のなかの異性としての兄妹・従兄妹たちなど、生殖行動にたどりつくことのない関係性と心身の揺らぎが表象されるのである。他者の欲望するものを欲望する〈私〉は、生身の男女を欲望するのと同じような切実さをもって、メディア化された身体を欲望し銀幕のスターを思慕しているのである。

第五章では、読み書きする者のジェンダーについて考察している。尾崎翠のテキストはしばしば読むひと、書くひとを焦点化して綴られる。また（小野）「町子」を視点人物あるいは語り手としたり、なんらかの形で話題に上せたりするテキスト群が残されており、パスティーシュやパ

ロディーを用いつつ、カノンおよび文学史からの女性の読み書きの疎外を表象している。また、「こほろぎ嬢」(1932年)をはじめ複数のテキストにおいて、ウィリアム・シャープとフィオナ・マクロードへの言及がある。男性名ウィリアム・シャープとしてはケルト文学運動にたずさわった批評家であり、女性名のフィオナ・マクロードとしては神秘主義的および象徴主義的な作家であったこの人物の著作は、尾崎の同時代においては松村みね子によって翻訳紹介されていた。尾崎翠は、このウィリアム・シャープとフィオナ・マクロードとの間に「恋」という関係性を仮構して「こほろぎ嬢」の物語を進める。「こほろぎ嬢」と呼ばれる無名の読み書きする女性は、ウィリアム・シャープとフィオナ・マクロードとの間に交わされる架空の〈恋〉を欲望しつつ、その欲望は、複数の〈母〉の表象と対照され、相対化されるのである。

尾崎翠の表現は、1910年代の初期散文から1930年代にかけて大きく変貌を遂げ、そこに後期自然主義から象徴主義・印象主義および表現主義にいたる同時代文芸思潮の流れを汲む画期を指摘することが可能である。ただし尾崎翠は表現主義をより狭義に、自然主義批判として、対象の変形、抽象化、エロティシズムの変容においてその方法の有効性を見出していた。尾崎翠の表現主義受容は、文体のパロディ、ナンセンス・ユーモアの手法とも結びついている。イメージと語りの変化に加え、表現主義映画演劇体験を通じて、尾崎翠は、メディア社会におけるまなざしの変容に対応し、たえざる刺激にさらされつつ舐めるように触れるように見ることについて、隔てられながらも主客の境界を逸脱する感覚を描いたのである。

II 審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文はモダニズム文化の隆盛期であった1930年前後の極めて短い期間、独特の世界観とユーモアを湛えたユニークな小説作品を発表するものの、1932年を最後に文壇から遠ざかり、1970年前後に再発見されることになる女性作家・尾崎翠について、小説作品はもちろん映画批評などを含めたテキスト群を精緻に読み込んでいく作業を通して、その可能性を改めて確認しようとするものである。

その特徴の第一は、(1) 出身地である鳥取出身の知識人、芸術家グループとの地縁的交流、(2) 兄たちを軸とした血縁の関係の文脈、(3) 東京生活での「落合文士村」「目白文士村」という近くて遠い知識人・芸術家グループとの結びつき、(4) 作品の掲載メディアに表れるモダニズムやナショナリズムなどの文化思潮、との接合を浮き彫りにしていることである。

第二の特徴は、映画という視聴覚メディアとの関係性、同時代の表現主義、ダダイズムなどの芸術潮流、アイルランド文学(ケルト文芸復興運動)といった最新の文化的動向に関心をもち、進化論、遺伝学、精神分析学、心理学など、20世紀の科学的な知の痕跡をテキストに見出し、それを鮮やかに抽出している点にも特徴がある。

第三の特徴は、それらの知的意匠を文学の表現に取り込んでいくにあたって、尾崎翠がパロディ、パステーション、デフォルメ、モンタージュなどの実験的な表現技法を駆使していることに着目し、モダン都市の若者文化、単身者文化を題材とする先端的なモダニズム文学として捉えつつ、同時に、社会の産業化、マス文明の際限ない拡張への批判を内在させている点を的確に論証している点である。これら複数のかつ共時的文脈を輻輳させる尾崎翠のテキストのハイブリディティとその可能性を徹底的に重視し、ときには尾崎翠の実人生をも炙り出しながらテキストの読

解を試みるその手法によって、本論は批評と研究を融合した独特の学術的文体を形成している。また、テキストの表現に即してそこに表出する複数の文脈を接続しようとする試みを継続することによって、論理が螺旋的に展開し、尾崎翠文学の可能性を追究するものになっている。

(2) 論文の評価

本論文は、尾崎翠のテキストに沿った精緻で柔軟な読みを深めることによってその多角的な魅力を浮き彫りにし、インターテクスチュアリティの可能性を読者に示した点で高く評価できる。また、それを実践するために、文学研究のさまざまな方法論はもちろんのこと、隣接諸分野の優れた知見を適切に援用したうえでの検証がなされている点でも評価できる。さらに、著者の巧みな語り口と洗練された文体は読者を魅了し、尾崎翠文学の可能性をさらに広げていく役割を果たしている。引用の出典や典拠の注記なども極めて正確かつ詳細であり、学術研究論文としての要件も十全に備えている。